

スポーツボランティアを知っていますか

みなさんの中の大半の方はスポーツの観戦をしたことがあると思います。日本人の好きなスポーツのベスト3は野球、サッカー、スケート・フィギュアスケート※1 なのだそうです。ですが、実はその中でプロ野球の一部の球場※2 や大半のJリーグクラブのスタジアムでは、試合会場の運営に多くのボランティアが関わっています。同じユニフォームを着用し、多くの場合ゲームをみられない状況の中、チケットのもぎりや座席の案内、ごみの清掃などさまざまな場所で活動している人々、意識してみなければアルバイトか主催組織のスタッフとしかみえないかもしれません。また、活動する組織によって、アテンダント、サポートスタッフ、スチュワードなど呼び名もいろいろですので、なおさらわかりにくい存在、それがスポーツのボランティアです。私自身は活動を始めて約16年、全国にスポーツボランティアの活動の場は着実に増えましたが、社会的な認知はまだまだ低いままです。このハンドブックでは、少しでも各地の活動の様子を発信し、これから活動する人、既に活動している人、スポーツボランティアを必要とする人、そして、スポーツイベントでボランティアと接する機会がある多くの方に、その世界を知っていただきたいと思います。

※1 2013年マクロミル・三菱UFJリサーチ&コンサルティングによる2013年スポーツマーケティング基礎調査より

※2 2014年3月段階では楽天イーグルス、日本ハムファイターズ、広島東洋カープの各球場でボランティアが活動しています

スポーツボランティアが増えているわけ

今、全国にスポーツボランティアが増えています。その中には市民参加型のマラソンを全国に波及させた東京マラソンなどで活動する人々もいれば、企業スポーツから地域サポート型のスポーツに大きく転換し、今年J3まで含めて51クラブに達したサッカーのJリーグをはじめとする、プロスポーツのボランティアもいます。スポーツボランティアには、無償で活動している指導者や、さまざまなスポーツ協会の関係者も含まれるのですが、とりわけ近年増えているのが、地域のスポーツチームやスポーツイベントを支える人々です。

その背景には、少子高齢化社会を迎え、学校や企業スポーツだけではなく、地域全体でスポーツを「する」「みる」「ささえる」ことの必要性が認識され、健康作りのためにスポーツを楽しむ人や、自分達の住む地域のスポーツチームのゲームを観戦し楽しむ人が、増加したことがあります。その結果、「する」人や「みる」人が、スポーツイベントやチームを「ささえる」意識が生まれ、スポーツボランティアの増加につながりました。

一方で、Jリーグの誕生は、それまで大都市圏中心だったプロスポーツが、全国に広が

るきっかけとなりました。しかし、企業などの支援の乏しい地方では、行政や市民がクラブをサポートすることが重要で、ここにもボランティアのニーズが生まれました。「ホームタウン制度」と呼ばれ、地域全体でサッカーチームを支えるそのシステムの成功は、やがてプロバスケットボールのbjリーグや、プロ野球独立リーグの誕生に大きな影響を与え、現在ではその大半のチームがボランティアを募集し、運営に積極的に活用しています。地域に生まれたスポーツ文化、それをまもり盛り上げていくこともまた文化ではないでしょうか。

誤解のないように付け加えれば、各地のボランティア組織では登録数の減少や継続率の低下で悩んでいるところが多くあります。新しいチームの誕生で全国に広がりを見せている反面、既存の組織では活動の停滞がみられるのです。この問題についてはまた触れたいと思います。

スポーツボランティアの想い (1)

スポーツのボランティアをしていると話すと、相手は決まって「もともとどんなスポーツをやっていたんですか」と聞いてきます。実は私自身は学生時代も社会人になってからもあまりスポーツをしたことはありません。もちろん、会社の中で「早起き野球」のメンバーに強制的に登録されたり、親しい友達同士でボーリングなどを楽しむことはありましたが、特に強くなろう、大会でいい成績を目指そうとは考えもしませんでした。ですから「特にスポーツの経験はないんです」と答えると、相手は不思議そうな顔をするのです。

「スポーツの経験がある = スポーツが好き = ボランティアをやる」 きっと質問者の頭の中にはそんな図式が出来ていたのでしょうか。その図式に合わせて考えれば私がスポーツボランティアを始めた流れは、「このまちが好き・スポーツが好き = ボランティアをやる」ということになります。この図式は、つまりボランティアとして活動している動機は本当に人によってさまざまです。

私は仙台市を拠点として、幅広いスポーツをサポートするために2004年に、サッカーのベガルタ仙台や、2001年の宮城国体、2002年のサッカーワールドカップなどのボランティアを経験した市民が集まって、「市民スポーツボランティア SV2004」という団体を起ち上げ活動しています。幸運にも翌年のプロ野球東北楽天ゴールデンイーグルスや、プロバスケットボールの仙台89ERSなどのボランティア組織の立ち上げに参加、今年10年を迎えます。

その活動については別の機会に紹介するとして、活動のひとつにボランティアアンケート調査があります。毎年各チームや組織がシーズンのスタート前に行う「ボランティア説明会」で実施していて、楽天イーグルスで今年6回を数え変化も含めていろいろなことを教えてくれます。

スポーツボランティアの想い (2)

何故スポーツボランティアの活動に参加するのか、その答えが知りたくて楽天のボランティアアンケートの中に、「あなたはどんな理由でボランティアに参加しましたか」という質問をいれています。

その中で多いのはやはり「チームが好き」という回答、けれどボランティアの活動が今年10年と継続者の割合が高くなることで、2008年に20.3%と最も参加動機として多かったものが実は継続的に減少していました。それが一転、2013年に初の日本一となったことで2014年は24.5%にアップ、ボランティアの参加理由のトップとなりました。やはりプロスポーツですから強いということは大きな影響力をもつということがわかります。

ちなみに、活動動機は「野球が好き」「仲間と一緒に活動できるから」「社会貢献したい」と続きます。これは私見ですが、誰かの役に立ちたいという気持ちは、多くの人の中にきっとあるものだと思います。「地元のチームをなくしたくない」という危機感や、「一緒に成長したい」という自己実現も、それによって「誰かの役に立つ」からこそ、無報酬で、時として厳しい活動環境の中でも、活動が続けられるのだと思います。それを理解した上で、できることなら、周りの人がそのことを認めてあげることが大切ではないでしょうか。

スポーツボランティア活動が「楽しい」と感じる瞬間のため (1)

活動への参加動機はさまざまであっても、それを長く続けるエネルギーが必要です。これまで全国各地でであった仲間へ聞くと、最も多い回答が「楽しい」からというものでした。この活動を楽しんでいる瞬間、それは本当にさまざまです。

2013年は、プロ野球で初のボランティアとして誕生した「東北楽天ゴールデンイーグルス」のボランティアにとって、忘れられないものになりました。チーム創設9年ぶりの日本一での優勝をともに体験できたからです。2005年に活動を開始した当初は、本当に厳しい環境で、プレハブの控室で休憩したり、想定以上に活動時間が長くその結果次第に仲間が減ったり、いろいろなことがありました。それでも本当に熱心なボランティアが多く、活動の中身も環境も年々改善されてここまで来ました。めざすのは日本一きれいなエコスタジアム。お客様がどんなに増えてもごみの落ちていない状況は、これまでの取り組みによってお客様と球団とボランティアによって作られてきたのです。

2011年には震災をともに体験し、心ならずも活動から離れた仲間もいました。それでも9年という時間は地元で野球が根づくには十分な時間でしたし（たとえば楽天イーグルスのスクールに参加している子供の数は、既に12球団一となっています）、昨年は特に選手の活躍によって地域が元気になっていくことが、本当に実感できました。そして、ド

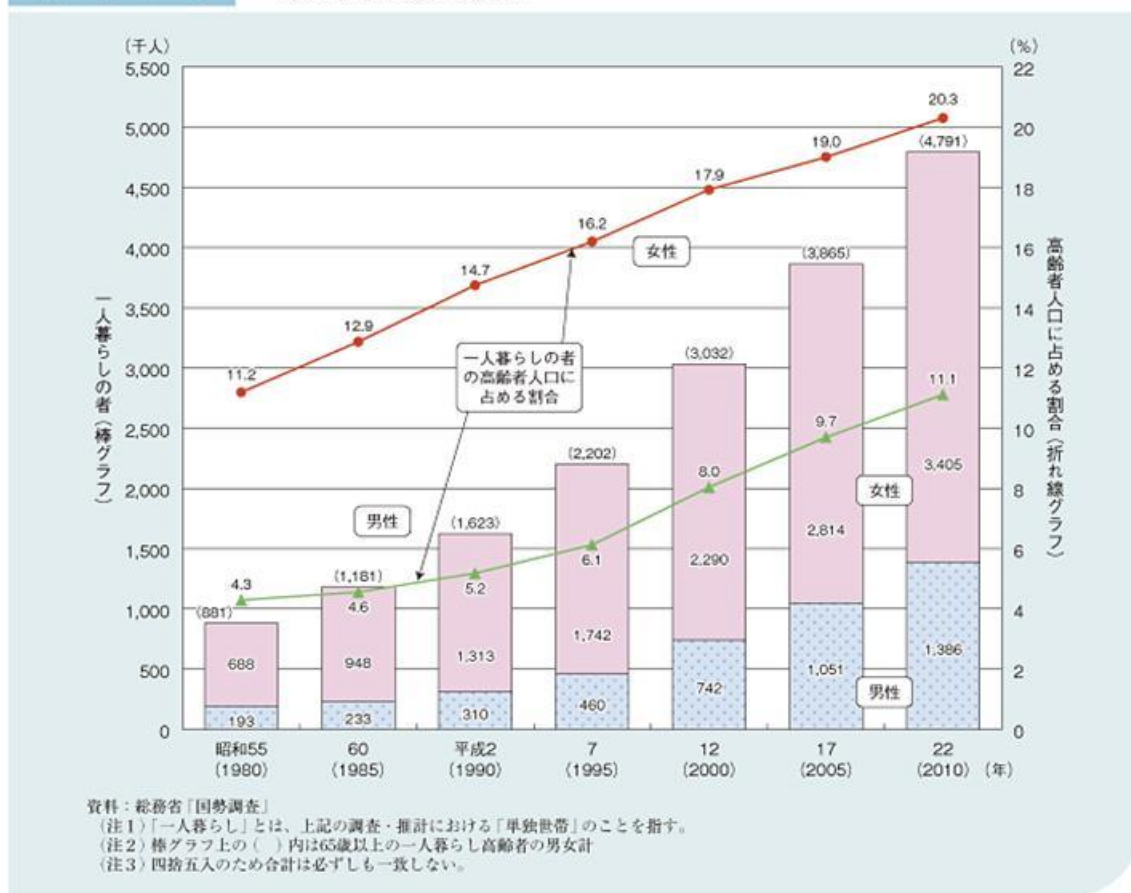
ラマチックな優勝へのストーリー。そこにいること、一緒にやってこられたことに感謝したくなる瞬間でした。シーズン後、何人もの仲間から「終わるのがもったいないと感じました」と聞きました。

スポーツを、そしてボランティア活動を通じての「楽しさ」。それは**多くの人と喜びをともにできる瞬間**にあるのかも知れません。

スポーツボランティア活動が「楽しい」と感じる瞬間のため (2)

当たり前のことですが、スポーツボランティアの活動では、来場者やチームスタッフ、何よりボランティアメンバーと話すことが多くあります。ここに来れば、仲間がいて一人じゃない。だから活動が楽しいという方々がいます。2010年の内閣府の調査では、65歳以上の高齢者に占める一人暮らしの割合は、男性11.1%、女性20.3%にもなっているそうです。私自身が仙台で活動し、ボランティアの方と話している際に、本当にスポーツボランティアがあつて良かった。この活動があることで自宅から出る事が出来、人と話すことができる。と感謝されることが何度かありました。「人と話し仲間が生まれる」、これはスポーツボランティア活動の大きなメリットなのです。

図1-2-1-6 一人暮らし高齢者の動向



そこから一步ふみだせば、ボランティア活動で知り合った仲間と旅行をしたり、共通の

趣味で楽しんだり、交流の幅が広がります。実際、ゴルフ、マージャン、そば打ちから応援するチームの応援ツアーなどを楽しんでいる仲間がいます。特別な資格がなくても気軽に参加できるスポーツボランティアをきっかけとして、さまざまな広がりが生まれているのです。

「世代を超えた交流が楽しい」という方もいます。広島で聞いた話しでは入場口のチケットもぎりを若いアルバイトと、年配のボランティアと一緒に担当したところ、アルバイトのマナーが非常に改善されたということがあったそうです。仙台の例でいえばボランティアにも高校生から80代の方まで参加しているため、若い人たちにとってもいい刺激になっているようです。

幸いなことに、スポーツボランティアの活動は今や全国に広がっています。東北はもとより、地域や種目の違いを越えてそのネットワークも生まれています。ボランティアは比較的活動の内容に共通性が高いため、「会話し仲間と楽しむ」ことは、情報や意見の交換によるさまざまな改善の取り組みなど次の楽しみにつながっているのです。

スポーツボランティア活動が「楽しい」と感じる瞬間のため (3)

日本の首都東京、その中心部を長時間にわたって交通遮断し、約3万6千人ものランナーが走り抜ける東京マラソン、その大会をささえるのもボランティアです。そこで体験した運営のノウハウは、全国に続々と誕生しているマラソン大会に広がり、そこにつながりを作っています。東京マラソンの2014年大会は2月23日に終了しました。驚いたのはその翌日に、ボランティアに感謝のメッセージビデオが届けられたことでした。そこには、笑顔で活動するボランティアたちの姿、何よりたくさんの方からの感謝の言葉が映像としておさめられていました。まだ活動の余韻が残る間に「感謝の気持ち」を伝える事、受け手にとっては最高の喜びになると思います。

実は東京マラソンには、こうした感謝に関する話題がほかにもあります。

2007年に最初の東京マラソンが開催された年、未体験の大会がなんとか終わってから大会の事務局で、共に苦勞してくれたボランティアに対し、メッセージを送ろうということいろいろと検討したのだそうです。そこで「ありがとう」という一般的な言葉に対し最終的に選ばれたのは、「あなたがいたから」というメッセージだったのです。

気持ちよく活動することは、当然会場の雰囲気作りを良くします。観客や選手に対して、チームスタッフやそこで活動するさまざまな関係者に対して、もちろんボランティアの仲間に対して、常に「感謝の気持ち」を持ち、互いにその気持ちを大切にすること、それは結果として「楽しさ」につながるように思います。

スポーツボランティア活動が「楽しい」と感じる瞬間のため (4)

1998年、当時サッカーJリーグの名門クラブだった「横浜フリューゲルス」が、メインスポンサーの撤退によって「横浜マリノス」と合併し、事実上消滅するという出来事がありました。1999年1月1日の天皇杯の決勝で優勝し、合併発表後一度も負けることがなかった選手たちの奮闘は、多くの人の記憶に残りました。

反面、名門チームであっても消滅することがあるという厳しい現実は、全国のサッカーを中心とするさまざまなスポーツクラブを応援する人々に、チームやクラブを残すためには自分達もできることで応援しなければという機運を生みました。当時仙台にはブランメル仙台というクラブがあり、1999年にスタートするJ2リーグに「ベガルタ仙台」と名称を変えて参戦することが決まっていました。しかし、実際には巨額の赤字を抱えており、けっしてフリューゲルスの事は他人事ではありませんでした。

そこで1998年にはボランティア制度が誕生し、1999年にはチームをさまざまな形で支援するために市民が中心となって支える「市民後援会」が発足したのです。現在、クラブは減資などの実施により、累積赤字を解消し身の丈に合わせた経営をしています。そして、ボランティアは1ゲームあたり100名以上の参加のもと、熱いサポートを続けています。チーム消滅の可能性という危機感が、ボランティアの活動の拡大につながり、チームとともに成長し、いろいろなことを作り上げていくことに喜びや楽しさを感じる人々が増えること、そこにはスポーツをすることや、見る事からさらに一步前に踏み出した形がそこにあります。

スポーツボランティアの継続率を高めるために (1)

どんなことであれ、新しいことにチャレンジすることには、楽しみもありますが一定の緊張感や不安もあるはずです。スポーツのボランティアも同じで毎年全国各地で初めての方々が大勢そんな気持ちを感じながら参加しているのではないのでしょうか。

せっかく参加していただいた方々に「楽しい」と感じ、継続的に活動していただくことは私たちにとって大きなテーマです。実は「ボランティアが継続しない」は、「ボランティアが集まらない」と同様、各地の仲間が集まると決まって課題としてでてくるもので、ある意味永遠のテーマともいえます。

この答えは、やはり新しいボランティアの立場にたって考えることの中にあるように思います。それが仕事であっても初めての場所で、知り合いもいなければ、何をしていいかもわからない状態、その不安をいち早く解消するためにはどうすればいいのか。仙台のスポーツボランティアでは、事前の説明会を行い活動の内容や最低限のルールなどを可能な限り、新人と継続の方を分けて行うようにしています。次に、ボランティアの集まるボランティア室には、ボランティア担当というメンバーを置き、御世話役的にボランティアにわからないことを説明するようにしています。

チームによってはリーダーに渡されるチームメンバーの一覧に、新人としてわかるよう

に印をつけたり、名札そのものの色がちがっていて新人の方がボランティア仲間の誰からもわかるようにすることで、声をかけたり、丁寧に活動の内容を説明するよう配慮しています。

何事もそうですが、最初がまずは大切。リーダーだけではなくチームのみんな**で初心者**を**あたたかく迎える事**、それは日常に来場者への対応にもいい結果をもたらすはずです。

スポーツボランティアの継続率を高めるために（2）

スポーツボランティアとして活動を新しく初めて、最初の不安がなくなって次に大切なことは何でしょうか。私はそれは「やりがい」や「仲間の存在」ではないかと思っています。

スポーツボランティア活動における「やりがい」、実はこれもなかなか難しいテーマです。裏を返せばそれだけ奥が深いということで、けっして悪いことではないと思います。ここでは共通性の高い点に絞って取り上げてみたいと思います。

そもそも「誰か」や「何か」の役に立ちたいということから参加するボランティアですから、実際に「誰か」や「何か」の役にたっていると実感できることが一番です。具体的にいくつか事例をあげてみましょう。

プロ野球の楽天イーグルスのボランティア活動のひとつに、ホームゲームがない日にスタジアムの見学会をするものがあります。月2回ほどですがいつもなら入る事ができないスタジアムの、選手控室や監督室、ブルペンやもちろんグラウンド、さらにはVIPの観戦施設までを約30分から1時間（その日の利用状況によってコースが変わる為所用時間が大きく違ってきます）かけて案内します。慣れたボランティアは途中単に施設の説明だけではなく、いろいろな過去の出来事なども紹介するので、参加される方も本当に楽しそうです。そして、見学会の最後に正面ゲートに戻ると、多くの場合参加された方から「ありがとうございました」と声をかけていただきます。通常のホームゲームのボランティア活動ではなかなか特定のお客様と話すことがないため、このお客様とのやり取りが楽しいというボランティアが結構多いのですが、それは見学案内の活動では役に立つ「誰か」が、比較的明確であるからではないかと思っています。

仙台のスポーツボランティアの活動の特色で「エコステーション」活動があります。これは最初サッカーのベガルタ仙台が始めたもので、会場に設置されたエコステーションにお客様にごみを持ってきていただき分別回収し、回収されたごみの多くはリサイクルや資源として活用されるようになっています。野球、バスケット、バレーボールまで仙台のプロスポーツでは基本的に同じ方法でエコ活動が行われていて、その活動を支えているのがボランティアなのです。長くこの活動を続けてきた結果、ボランティア活動への参加動機として「エコのため」という回答をされる方も増えてきました。これもボランティア活動を通じて「何か」の役に立つというポイントがはっきりしているからだと思っています。

ただ、「誰か」や「何か」の役に立つこと、それをしっかりボランティアに伝える努力は

多くの場合決して十分ではありません。シーズンの前後の説明会や報告会などを活用して、ボランティアが活動した事でどれだけいい結果が生まれたのか、あるいはどんな新たな目標が生まれたのか、伝えることが本当に大切です。

スポーツボランティアの継続率を高めるために（3）

ボランティアに参加するのはあくまで個人です。たとえ親しい仲間と一緒に申込みをしたとしても必ず常に一緒に活動できるわけではありません。それだけに、いかに同じ場所、同じチームとして活動する仲間といい関係を作れるか、は活動を継続するための大きな要素となります。

そのためにはまず最低限メンバー同士「名前」で呼び合い、互いを認め合う事が必要です。仙台のボランティア活動でも最初は個人情報ということで、名札をつけないで活動することがありましたが、現在ではプロスポーツではすべてスタッフもボランティアも名札をつけています。もちろん、意識づけという意味合いもあるでしょうが、何より毎回顔ぶれがかわるボランティア活動で、よい**チームを作る**ためには名前という情報は基本的なものだと思います。

ボランティアの活動の内容はさまざまです。毎回かわるポジションやメンバーを上手にまとめていくのは、ベテランのボランティアさんでもなかなか大変です。活動の際には一般的にリーダーが決められ、メンバーの連携や活動の決まりごとや手順を伝えます。その上で、リーダーのもっとも大切な役割は時間的に余裕があればいろいろな話しをして、互いにサポートしあえる人間関係を作る事なのです。このあたりはまたリーダー編で説明したいと思います。

仲間を増やすために（1）

各地の仲間が集まると最もよく出る話題が「ボランティアが減っている」ということであり、「新規の登録者が増えない、続かない」というものです。よく出る話題ということは、いろいろな取り組みをしてもなかなか結果がでにくい、根深いテーマといえるのでしょう。「続かない」というテーマについては、これまで「継続率を高めるために」ということで取り上げてきましたが、実は「減っている」ということにつながりますので、別の視点で改めて取り上げてみたいと思います。

はじめに「新規の登録者が増えない」というテーマです。私の活動する仙台は、年間を通じて約1,000名の人々がスポーツのボランティア活動をしています。しかし、それでもボランティアの認知が高いとはいえません。つまり、スポーツボランティアの存在、**活動が知られていない**ことが、増えないことの背景にあると思います。

2004年11月、宮城県仙台市にプロ野球「東北楽天ゴールデンイーグルス」の誕生が決まりました。そこで地元ではさっそく官民一体の支援組織「楽天イーグルス・マイチーム協議会」を立ち上げ、さまざまな支援の在り方を検討したのです。そのひとつとして「応援・ボランティア部会」が組織され、プロ野球初のボランティアの組織作りがスター

トしました。スポーツのチームは本拠地とする地域からの観客をメインとしています。その地域とのつながりを象徴する存在が、応援するファンであり、ボランティアと考えられたのです。こうした経緯は地元メディアを通じて発信され、もちろんボランティアの募集についても、地元新聞にも掲載されました。ゲーム数が多く連戦が多くある事や、延長も含めてどうしても活動時間が不規則で、長くなることなどを想定し、募集人員は300名を計画していたのですが、なじみのない活動ということもあり募集期限が迫っても実は半分にも達しませんでした。

仲間を増やすために (2)

ボランティアが少なければ活動そのものを縮小すればいい、というのはひとつの答えですが、私達は楽天イーグルスの一年目のボランティア活動では、それはぜひ避けたいと考えました。そこで地元新聞に「ボランティアが足りない」という見出しで、このままではゲーム運営ができない、という記事を掲載していただいたのです。この効果は抜群で最終的には目標近い280人の登録がありました。自分がやらなくても、誰かがやるだろう。自分が支えなくてもチームはあり続けるだろう。というのは実は幻想です。観客が減りボランティアの支えを失ったチームは、間違いなく消滅します。その危機感をいかに伝えるかは、ボランティアを組織するチームにとってとても大切なことなのですが、そこから生まれるべきアクションは全国的に十分とは思えません。

最初に確認すべきは、チームなりスポーツボランティアの運営をする人々にとって、本当に**ボランティアをどう位置づけるのか**、なのです。地域の人々のある種の代表として、チームと地域をつなぐ重要な存在としてみるのか、単にゲームの運営をそつなくこなしてくればいいのかという存在としてみるのかでは、シーズンオフも含めての対応は全く異なるはずですし、ボランティアが減る事に対し危機感も違うはずです。ともすると、ボランティアの減少をボランティアは心配しているが、チームは意外に無関心ということもあるようです。さきほど書いたように、ボランティアは地域とつなぐ存在という視点からみれば、一人のボランティアの減少は、その家族や周辺の人々とのその方を通じての接点を失う事なのです。その想像力をぜひチームスタッフには持っていただきたいと思います。

仲間を増やすために (3)

ボランティアを増やすことの答えはこれまでにいくつもありました。ひとつはチームがボランティアの位置づけを明確にし、活動やその存在は正確にしっかり情報発信することです。ともすると最近の傾向として「ホームページ」だけで募集し応募もホームページで受けるというところもあるようです。しかし、スポーツボランティアの場合、もっとも活動時間に余裕をもって参加いただけるのは、60歳以上の定年退職後の方々なのです。この中にはまだまだパソコンを使えない環境にある方も大勢います。したがって、チラシや地元メディアによって、**活動やその楽しさを伝える工夫**は必須です。

また、ボランティアの活動をどのように伝えるかについても、もっともっと工夫がほしいところです。ただ、単に「案内・清掃・入場口対応」と書かれていたとして、楽しそうだし、やってみたいと思う人はどれほどいるのでしょうか。最低限様子を伝える写真を入れたり、内容をもっとわかりやすくしたり、先輩ボランティアからのメッセージをつけたり、やれることはたくさんあるのです。

このところ仙台ではスポーツボランティアが増加しています。それはさまざまなスポーツイベントが増えたことが要因です。しかし、とくに一過性のイベントではこれまで継続的な活動への呼びかけは不足していました。2001年の宮城国体では1万人以上のボランティアが活動しましたが、イベントが終わると参加者の資料は処分されてしまい、活動の継続にはあまりつながりませんでした。継続して活動を希望する人々に対し、どう情報を届けるか。この視点がとても大切です。

仙台では2012年に1,000人以上のボランティアが参加した「ねんりんピック」が、そして、2013年には「仙台国際ハーフマラソン」にも一般のボランティアが参加しました。その際に、大会後も継続してスポーツボランティアの活動を希望するかどうかをアンケートで確認し、希望者にさまざまなスポーツボランティア募集の情報を発信したところ、それまで減少傾向にあった野球・バスケット・バレーボールなどのボランティアが、一様に増加したのです。その際にいわれたのは、スポーツボランティアはしたいけれど、どこに情報があるのかわからなかった、というものでした。そう考えれば、同じ地域のさまざまなスポーツイベントには、潜在的な仲間がたくさんいるということに気が付くのではないのでしょうか。一過性にしない工夫、ぜひやってみてください。

仲間を増やすために (4)

「ボランティアを連れてくるのはボランティア」とは良くいわれる言葉です。実際に活動して楽しいとかんじたり、やりがいをかんじれば自然に友人や知人にその楽しさを伝えます。すると、話しを聞いた方が新たに活動に参加するというパターンが生まれます。

プロ野球の楽天イーグルスでは、週末や祭日に「ボランティアブース」というテントをだしています。ここでは活動しているボランティア自らがボランティア活動について紹介したり、体験ボランティアができるようになっています。また、大勢のお客様がくる場所ということで仙台のほかのスポーツボランティアのチラシなども置いています。こうした取り組みの結果登録し現在活動している人たちもいますし、何より自分達の活動を誰かに伝えることについて、ボランティア自身がかんがえるきっかけになっていると思います。

親会社がIT企業で新しい取り組みに積極的にチャレンジする楽天ということもあって、楽天イーグルスのボランティアでは、活動に参加するたびにポイントがたまり、そのポイントで観戦チケットがもらえたり、シーズン終了後にグッズがもらえたりします。その中に紹介ポイントという仕組みがあり、ボランティアの仲間を紹介し、紹介された方が実際

に活動すると紹介者にポイントがつくというものもあります。いろいろな手法で仲間を増やすことは、ボランティアでできること、チームができること、そして連携してできる事があるということなのです。

仲間を増やすために (5)

もし現在いるボランティアが身近な人に対して、楽しいからぜひ一緒にボランティアをしませんか、と声をかけないとしたら。そこにはもしかすると現在活動しているボランティアにとっても、継続をためらうような問題がありそうです。その**問題を取り除くことが間接的にボランティアを増やすことになる**のです。

ひとつの例として、プロ野球の楽天イーグルスのボランティアの事をお伝えしたいと思います。チームでボランティアの活動がスタートしたのは2005年のことでした。その登録数をみると2006年に300名を記録した後は、毎年減り続け2012年には178名となりました。その原因は不規則で長時間の活動にあることは、参加している者すべてがわかっていることでしたが、最後までしっかり活動したいという思いが強く、なかなか改善をすることができませんでした。しかし、ボランティアの参加者が減るという事は、残ったボランティアの負担が増えるという事であり、2012年のシーズン終了後の話し合いで、2013年からの活動時間を試合開始後3時間か、ゲームが8回の表を終了するまでのどちらか早い方で終わることにしたのです。

活動時間短縮、終了時間の明確化は確実に登録数の増加につながり、チームの好調もあって2013年には206名に達し、なんと2014年はホーム開幕の段階で234名と大幅に増えているのです。別の変化としてこれまで男性が中心であった顔ぶれに女性が新たに参加していますし、若い方々も増えているようです。もちろんボランティアが早く活動を終えるということは、チームにとってはアルバイトなどを増やさなければならないという新たな負担を生みます。しかし、そのメリットとデメリットを考えても、ボランティア制度の維持と発展を考え改善をしたことは、大きな決断だったと評価したいものです。

仲間を増やすために まとめ (6)

ボランティアに限らず、観客を増やすことも、地域との連携を強くしていくことも常に互いのことを知り、理解し、協力しあうという姿勢が大切です。例えばボランティアは、単なる労働力として扱われることを嫌います。できる限り**共通の目標や夢**をもち、たとえ活動する環境が悪くなくても、活動時間が長くなっても、想いが通じれば続けることもできるのです。このあたりはまた詳しく紹介したいと思います。

さらにいかに情報を発信するか、だれに対してどのように伝えるのかは、どうも発信側の都合が優先されていることが多いようです。その意味では**ターゲットを明確にし情報を届ける手段を考える事**がポイントになります。

そして、ボランティアが集まらない原因は何か、それをどう**改善**するかに前向きに取り組むことです。まずは現在いるボランティアの方々が活動に参加することに誇りや喜びを

感じてもらいましょう。そのためには意見交換はもちろん、小さなことから活動しやすい環境を作ったり、絶えず**感謝の気持ちを伝える**ことが必要です。御互いに「ありがとう」「お疲れ様」が気持ち良く言い合える雰囲気作り、まずはここからスタートしてはいかがでしょうか。

ボランティアのやる気をひきだす (1)

これまでの部分と重なるところも多くありますが、ここからは単に活動に参加するだけでなく、「ボランティアのやる気」を引き出すことについて、考えたいと思います。

最初は「**ボランティアの声を活用すること**」です。いうまでもなく多くのスポーツイベントでボランティアは、お客様に一番近い場所に配置され活動することが多いようです。入場口や案内、清掃などで来場されるお客様からみれば、主催者側のスタッフとしてみられるボランティアには、いろいろな質問や時として要望やクレームが寄せられます。

たとえば、「再入場の可否について」「喫煙所やトイレの場所について」問い合わせが多い場合、表示や案内が不十分であることがかんがえられます。つまり分かりやすい表示や案内をすれば、質問は減りお客様にとってもサービスが向上するのです。「授乳室がほしい」「車イス専用の席がほしい」などの要望では、きちんと迅速に対応することで、熱心な固定客が増えるかもしれません。

スポーツイベントは、プロスポーツであれ、行政や種目別の協会の主催するイベントであれ、来場し見る人や応援する人がいてこそ、そこに楽しさや収益が生まれます。つまり小売店や量販店などと同様に客商売の要素をもっています。ボランティアを通じて「お客様の声」を聴きより良く改善しようとする姿勢がなければ、地域からの支持は決して大きくなるのではないのでしょうか。

時折ですが、ボランティアはさまざまに人数も多いので、とても要望やその声に対応するのは無理という方がいます。つまり言われても答えを返すのが難しいというのです。一方であるサッカーチームでは、ベテランのボランティアのところに要望や質問などを集め、回答のたたき台をボランティアが作るようになりました。もちろん、そのまま回答するのではなく、そのたたき台をチームのスタッフが確認し、場合によっては修正したりすることもあるそうです。その中には残念ながらさまざまな事情で要望が実現できないことも含まれています。理由を明確にしてだから残念ながらできません、ということも立派な回答で、提案しても無視し続けられるよりはよほどいい関係を作ります。できないと放置するのではなく、どうすればできるのか、ポイントはその気持ちだと思います。

ボランティアのやる気をひきだす (2)

休憩時間などに多くの仲間と話していると、スポーツのボランティア以外にその方がやっていることや好きな事、これまでにその方がやってきた仕事や経験についてわかってきます。園芸が好き、カメラが好き、大工仕事が好きという人もいれば、スポーツ以外に観

光案内のボランティアをしている人、語学が得意であったり、福祉施設で障害をお持ちの方の御世話をしていますという方もいます。

ボランティアの活動は、多くの場合あらかじめ決められた内容・ルールに基づき、領域が決まっています、あまり個人の得意とするスキルを活かしたり、もちろん勝手にかえたりすることはできません。もし、すこし視点を変えてその方が**得意とすること、できること**で**ボランティア活動**をすることができればきっとやりがいにつながるのではないのでしょうか。

いくつか実例を紹介してみたいと思います。スポーツのボランティア活動はたいていの場合記録が残らないものです。しかし、意外に多くのスポーツボランティア組織で、ボランティアブログを作って公開しています。その中には実に丁寧に作られ、活動の楽しさが伝わってくるものや、ボランティアに参加したいと感じさせるものもあります。このような情報発信は、時間に追われるチームやイベントのスタッフよりも得意なボランティアにルールを決めて任せることは実に有効だと思います。

<スポーツボランティアブログの事例>

※ TEAM VAMOS オフィシャル blog (サッカー 松本山雅FC)

<http://www.matsuaz.com/team-vamos/>

※ 秋田SVハピネッツブログ (プロバスケット bjリーグ 秋田ノーザンハピネッツ)

<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/bbakita/>

スポーツのイベント会場は、やはり清潔で快適であってほしいとは誰もが思う事だと思います。そうした環境を作るため大分や仙台のサッカースタジアムではゲームのある日に、トイレが花を飾っています。また、プロ野球の楽天イーグルスでは、球場の空スペースを花壇として整備しています。こうした活動には、園芸の知識が豊富なボランティアが積極的に参加しています。どのような準備をするのか、事前の打合せから始まり実際の活動まで好きなことだからこそ、笑顔が多くみられます。

小さなことから、できる事から初めてみてはどうでしょうか。そうすればボランティアの数だけの無限の可能性がそこに生まれます。

ボランティアのやる気をひきだす (3)

それが職場であれ、スポーツのボランティアの活動の場であれ、楽しく感じられるということは、一緒にいる人々との**コミュニケーションがうまくいっている**ということではないのでしょうか。しかし、良く聞かれるのは、誕生期のイベントや組織の規模がコンパクトだった時には、大変だけれどもお互いの距離が近く、しっかりととれていたコミュニケーションが、スポーツイベントが大きくなり、組織が複雑になって関わる人が増えると共に互いを理解しにくくなったり、最悪の場合には、創世期において大きな貢献をしてきた方に対して、後から活動に入って来たボランティアとの関係から、その発言や活動を制約し

ようとすることで、その中心的メンバーが「やる気を失い」抜けていくケースが後を絶ちません。

スポーツに限らず人も組織も当然のことながら変化します。けれどその変化とは、しなやかで心や想いを大切にすることでなければいけないと思います。ともすると、組織や担当が変わっていく際に、それまでの経験や人を否定し切り捨てていくことがあります。もちろん、長く活動し経験豊富なボランティアが絶対的に正しいということではありません。けれど、チームやスタッフは短期間で変わっても、そこに経験豊富なボランティアがいるのであれば、まずはその経験を上手に活用することが大切ではないかと思うのです。

ではコミュニケーションを良くするためにはどうすればいいのでしょうか。実はこれもスポーツボランティアの活動ではとても良く取り上げられる課題です。では、本当に難しいテーマかという、私は答えはとてもシンプルなものだと思うのです。つまり、ベースに以前も書いた「互いに感謝する気持ちを失わない事」、その上で、「何か問題があればとことん話し合うこと」です。不満が多く継続者が少ない組織の場合、陰口や批判ばかりが目立ってきます。その状態は単にまわりの雰囲気をこわすだけで何もいい方にかわりません。本来のボランティア活動に大切な「共に解決に取り組む姿勢」を忘れないようにしたいものです。

ボランティアのやる気をひきだす (4)

現在、スポーツボランティアはサッカーやバスケットをはじめ、全国各地のプロスポーツチームで活動しています。チーム数の増加に伴い、毎年その数は増えていると思います。2012年の12月に「全国スポーツマネジメント学会」が仙台で開催され、その際のスポーツボランティアに関するワークショップのために、仙台大学と私達市民スポーツボランティアSV2004で、全国のさまざまなプロスポーツのチームや、ボランティア制度を持っているスポーツ施設に対し、ボランティア活動に関するアンケートを実施したことがあります。結果は128の依頼に対し、半数の64チーム・施設から回答がありました。この中で、ボランティア研修会を開催していると回答したのは、わずか25組織で、その内容の多くは救命やAEDの研修でした。

もしあなたがボランティアに参加し、そのスポーツなりチームが好きで継続的に支える活動をしてきたとします。やる以上はできる限り楽しくしっかりやりたいと思うし、もっと良くしたいと思うのではないのでしょうか。つまり、熱心な人ほど成長することへの意欲が強くなるのはごく自然なことです。実はこの「成長をサポートする」仕組みが、スポーツボランティアの世界には決定的に欠けているとかんじます。

こうした実情の背景には、ボランティアは自由意志で参加しているのだから、責任を与えたり、面倒な研修などへの参加を依頼すると辞めてしまうから、という誤解や窓口を務めるボランティア担当の仕事の忙しさなどがありそうです。また、実際、責任や研修などを嫌うボランティアがいることも事実です。ですから、別に全員参加を強制するのではな

く、もっと気楽に希望し、その適正があるという方に責任ある活動をお任せしたり、研修に参加いただくことでいいのではないのでしょうか。人が成長すれば、組織の基盤が強くなると共に、継続性も高まるものだと思います。

ボランティアのやる気をひきだす (5)

発展途上のスポーツボランティアの活動において、全くの課題のないボランティア組織はおそらくどこにもないのではないのでしょうか。けれど、課題の内容はそれぞれの組織でさまざまな相違はありそうです。「コミュニケーションがとれない」「リーダーや人が育たない」「登録数が増えない(減っている)」「楽しみがない」など

研修(というと堅苦しく感じるようです、目的は一緒でも交流会・意見交換会・親睦会など表現とやり方を工夫することで、参加する方が増えるようです)を行う場合、こうした「課題解決型」のものをぜひ優先したいものです。このときにぜひいくつか押さえてほしいポイントがあります。

※ 出来る限り実践者を講師とすること

(自分達と同じ目線をもつ人の言葉は受け入れやすいようです)

※ 具体例を多くもりこむこと (自らに置き換えて聞くことができます)

※ わかりやすい表現を取り入れる事

(映像や、場合によってミニテストや実技は効果的です)

※ 参加者にも考えてもらう時間をつくる

(聞くだけではなく、自ら考えることで参加意識が高まります)

※ 参加者同士の交流も図る

(ワークショップやゲームなどで仲間意識を作る事も大切です)

※ 参加したくなる企画にする

(終わってから飲み会をセットするなど、楽しい企画と連携させることで参加者を増やしましょう)

※ アンケートをとりましょう (一方通行型の企画にならないようにしたいものです)

ボランティアのやる気をひきだす (6)

どんなスポーツにもシーズンオフがあります。ゲームやイベントがないということは、その期間スポーツボランティアの活動もなくなります。実はこのシーズンオフをどう活用するのか、この考え方が大きな違いを作ります。

年間のボランティア活動でその期間が比較的長いのがJリーグなどのプロサッカーで、次いでプロ野球やプロバスケットなどが続きます。一年のボランティア活動が終わると多くの組織では「ボランティア感謝の集い」などを開催し、チームスタッフや選手とともに楽しみ、シーズンオフを迎えるようです。短ければ3ヶ月、長い場合は半年にも及び期間

ボランティアの多くは活動を休むこととなります。仙台は幸いなことに野球やサッカーのない期間に、バスケットボールやバレーボールのゲームがあるため、年々継続的に活動する方が増えています。その結果、ネットワークが広がり、いいことは互いにひろめることができます。また、この期間に自分の趣味などの活動をするという方もいます。ですから、シーズンオフがあること自体はとてもいいことだと思います。一歩すすめるチームによっては希望者やリーダーを集めて、活動を見直すための資料を作成したりしているところもあります。その数はまだまだ少ないのですが、これも大事なことです。

長いシーズンオフが終わると多くのチームでは新たなシーズンに向けたボランティア説明会が一斉に開催されます。しかし、気がつけば昨年まで一緒に活動していた仲間が減っている、以前のアンケート調査ではなんと半数も入れ替わるというところもありました。シーズンオフにいかに関心のあるボランティアのモチベーションを維持し高めるか、「どう活用するか」が大切という目的がそこにあります。

キーワードはやる気を育て課題を解決するための「研修」、チームとボランティア、ボランティア同士のコミュニケーションを円滑にするための「交流」、新しいシーズンや大会に向けての「準備」、私をもっとも注目している長野の松本山雅FCでは、後援会の中にあるボランティア組織と連携して、選手・チームの壮行会から、シンポジウムに研修会、さらにボランティアの説明会だけでも数回実施する充実ぶりです。その取り組みは確実にボランティアの増加や、活動しているスタジアムの評価につながっていて、素晴らしいと感じています。担当が少ないからではなく、ボランティアと連携して取り組むことが大切だと思います。

ボランティアのやる気をひきだす (7) まとめ

各地のボランティアと話していて本当にさまざまな方が、楽しく活動していることをうれしく感じます。元気で伸び伸びと活動している人と接していると、こちらにも元気をもらいますし、いいアイデアも生まれてきます。そして、そんなボランティアがいるチームやスポーツイベントは人を大切にして、お互いの連携がうまく取れていると感じます。

しかし、残念ながら会うたびにできないことを口にする仲間もやはりいます。そして、そうしたチームやイベントは、偏った見方かもしれませんが、地域にしっかり根付いているようには見えません。ボランティアのやる気をどう引き出すのか、運営する側にも参加するボランティアの側にも、課題は多くありそうです。

継続的なプロスポーツのボランティア制度をリードしてきたJリーグ、今、多くのクラブが20周年を迎えたり、間もなく迎えるようとしています。その結果ボランティアにも世代交代や、マンネリ化などの新たな課題も生まれています。「する」「みる」というスポーツ文化を「ささえる」人々、これからもその存在は重要になっていくと思われます。まずは、全国的にはスポーツボランティアの社会的な認知を高め、どうしても趣味や道楽の延長線上でとらえられることの多い活動やその目的を、より多くの人々に知っていただく

いと思います。

スポーツのイベントの会場で活動していることの多くは地味で大変なものが多くあります。けれどその活動を続けるエネルギーとして、一人ひとりのボランティアには夢や楽しみがあるのです。存在を認め感謝をこめて「いつもありがとう」と声をかけて下さい。よろしくをお願いします。

スポーツボランティアリーダーの役割 (1)

さまざまなスポーツイベントでボランティアが活動する場合、活動内容ごとにリーダーが任命され、ひとつのチームを作って活動することがあります。ではリーダーの役割や要件、リーダーの活動をささえる仕組みはといえば、正直明確でしっかりとしたものがある組織は多くはありません。ここからは、会社でいえば中間管理職として、運営する組織と一般のボランティアの間で、非常に苦勞し頑張っているボランティアリーダーについて考えてみたいと思います。

前述の全国スポーツボランティア調査の際に、「ボランティア活動にリーダー制度はありますか」との質問に対し、回答があった58組織のうち31(53.4%)でリーダーを制度化していました。リーダー制度がないと回答した組織では、運営組織のスタッフや、スポーツのイベント会社スタッフがその代わりをつとめているケースが多いようです。種目別にみても、活動が比較的長いサッカーではJ1クラブの多くがリーダー制度を採用しているのに対し、地域リーグやJ2チームでは制度がないところが多くありました。その要因としてはボランティアの登録人数とも関係があるようです。この傾向はバスケットや野球にもみられますが、ボランティアの人数が少ない両種目ではリーダー制度のあるチームがまだ少数派でした。

リーダー制度を採用している組織で、リーダーを対象にした研修会を実施していると回答したのは10組織ありました。つまり、リーダーを育成する取り組みがあるといえます。しかし、一般的には経験の多い人や、年齢が上の人が任命されているケースが多いと聞きます。近年ではマラソンなど規模が大きく、ボランティアの人数も多くなると、参加したボランティアの中から希望する人に、リーダー研修を行い資格を証明するケースもでてきました。その役割を考えれば、そこに一定の要件を求めていく、そんな時代になってきているのではないのでしょうか。

スポーツボランティアリーダーの役割 (2)

スポーツボランティアの活動で、リーダーがいることのメリットとデメリットがあります。なんといってもメリットは、ボランティアから選ばれた人がリーダーを務めることで、**運営組織に対しボランティア目線での意見や提案がしやすくなり、その結果としてボランティアに一定の主体性なり、モチベーションのアップが期待できること**でしょう。自分も一生懸命活動し、リーダーになるという夢にもつながりそうです。

デメリットは率直にいえばさほどあるとは思いませんが、まれにリーダーが運営者との意思疎通を阻害したり、ワンマンでチームワークを乱したりすることがあるようです。しかし、それはリーダー制度のデメリットというよりも、むしろ個人の資質の問題ではないでしょうか。前述のリーダー制度のないボランティア運営の場合、ボランティアの主体性が育ちにくいという話をよく聞きます。私もプロバスケットのボランティア活動で、県外のイベントに参加した際に、若いスポーツイベント会社のアルバイトに、いいように指示を受けてやる気をなくしたことがありました。彼らはお金をもらって仕事としてやっているということもあって、ビジネスライクにこうしろああしろと一方的に指示をしていました。そこには本来あるべき、なんのために、いつまで、どのようにというポイントが欠けていたのです。そのイベントなり、チームなりのためにどうすればいい活動ができるのか、そして、ボランティアを一人の人間としてどのように関係を作るのか、リーダーの役割は重要です。

スポーツボランティアリーダーの役割 (3)

ここからはリーダーの役割について、考えてみたいと思います。

まずは「**いいチームワークを作る**」ことです。そんなことは当然という声も聞こえてきそうですが、年代も性別も活動に参加する目的も様々なボランティアをひとつにまとめていくことの難しさは、各地で活動しリーダーを務めたことのある方であれば良くわかっているだけだと思います。その意味ではリーダーには「統率力」「指導力」や、それを可能にする「コミュニケーション能力」が必要ですし、さまざまな場面での確に対応できる「危機管理能力」や、運営組織との連携をスムーズに行える（しかも、お客様やボランティアの目線にたって）「問題解決力」といえるものまで求められます。もちろん、こうしたスキルがすべて完璧という人は多くはありませんから、そのためにチームワーク、そこにするメンバー全員の連携が大切になるのです。

リーダー制度を採用している組織では、リーダーは一般のボランティアより早く集合、運営上の注意点などがいち早く伝えられます。その上で、ポジションごとにミーティングでそのことを説明したり、活動中はメンバーの休憩や食事、トラブル対応などに気を配るはずですが、活動が終われば、当日の問題点や改善につながる意見をまとめて運営組織に伝えることも大切です。当然活動時間は一般のボランティアより長くなり、時としてスポーツイベントのない日に集まり、研修やこれからの予定の確認をするなど、その負担は意外に大きいものです。

しかし、ともすると運営組織からは、うるさがられ一般のボランティアからは煙たがられるということもあり、なかなか報われないポジションでもあります。それも含めてリーダーという割り切り、私が知っている方の多くは苦笑しながらそういいます。**リーダーの立場をよりしっかりとしたもの**にすること、スポーツボランティアの将来に大事なテーマのひとつといえます。

スポーツボランティアリーダーの役割 (4)

引き続き「いいチームワークを作る」ことについて基本的な事例をみていきたいと思います。自分も含めてうまくいったと感じられる活動では、参加したボランティアさんが笑顔で活動の終わりに元気に「ありがとうございました」「お疲れ様でした」という声がかけられます。それは、活動時間の長短や、内容の負荷の大小だけでそんな表情になるわけではありません。

いい終わり方ができる活動では、やはりメンバー間のコミュニケーションがとれていきますし、仮に問題が発生しても全員の力で解決できるものです。リーダーの話をきちんと聞き理解する、最も基本的なことですが、これは話し方ひとつで、反発されたり、無視されたりすることもあります。表情をみて、もし理解されていないと勘じたら、早い段階で個別にフォローする必要があります。どうしても孤立しがちな方もいます。慣れないためや、人見知りするなど要因はさまざまですが、リーダーならば、これも早い段階でサポートしたいものです。簡単な自己紹介や、経験の有無などについて話しながら性格を把握し、人当たりの良い元気な経験者と組み合わせるなどすれば、帰りにはきっと笑顔がみられるはずです。

ボランティアの活動で多いトラブルが、食事や休憩にかんするものです。それ順番であったり、時間の長短であったりで、とにかく自分にとって不公平と感じられたときに発生しているようです。できれば最初にルールや決め事をし、きちんと納得していただけるように確認するだけでこうした不平は減るものです。

次によくあるのが、聞いても答えがないことというのがあります。お客様に聞かれたから質問したのに、回答がなかった。場合によってはその回答が自分にとっては正しくないと思える、というものです。ボランティアが納得していないのにお客様に伝えることはできませんから、命令するのではなく、丁寧に説明し理解していただくことが大事です。

いいチームワークを作るために、**聞く姿勢と丁寧に答える力、そして、全体を公平にみて対応する力**が求められます。日々、勉強、でしょうか。

スポーツボランティアリーダーの役割 (5)

リーダーの役割に大切なことのひとつは「つなぐこと」です。それは「ボランティアと観客」、「ボランティア同士」ということもあれば、「ボランティアと運営組織」ということもあります。ここでいう「つなぐ」ことは、一緒になって「問題点を解消する」ことであり、「より良い関係を作る」ということだと思います。

さて、つなぐことをスムーズにしかも効果的に行うためには、どうすればいいのでしょうか。もちろんつなぐことで何をしたいのかによって、やり方や相手、必要な要素は違ってきます。まずは、何をどう改善したいのか。それは、最終的に観客（お客様）にとっていいことなのかを整理し、どうつなげばいいのかを考える必要があります。つまり「優先

順位をつけること」、つなぐべき「相手とのネットワークがあること」、「成果をわかるように提示できること」、そして、何より「自らが率先して実行する熱意を持つこと」がリーダーには求められるのではないのでしょうか。

たとえば、プロバスケットのbjリーグの仙台89ERSの場合、シーズン中に26のホームゲームがあり、おおむね平均40名を越えるボランティアが活動、チアリーダーやチームスタッフ、警備や放送スタッフなど多くの人々が運営に関わっています。けれど、長い間シーズンが終わってもボランティアから見て、名前を知っているのはボランティアの窓口のメンバーだけという人も多かったのです。来場するお客様にいいサービスを提供するためには、まずは運営に関わる人々の連携を良くすることが大切、私たちはそう考えました。

まずオフシーズンにチームとの打合せの場を持ち、関係者の連携の強化について提案しました。その上で、ボランティアとチームスタッフ、チアリーダーとのワークショップを開催したのです。一緒に何ができるか、笑顔での話し合いはとても盛り上がり、そこからボランティアの活動前に、チアリーダーから軽体操を覚えてもらう取り組みが生まれました。さすがに毎試合ともなれば、互いに身近に感じるようになってきたと思います。

また、ボランティアの説明会ではチームスタッフ全員の顔写真と名前、さらに一言メッセージを資料にまとめてもらいました。シーズン中にはインターンのボランティア担当の学生がボランティアニュースを作ってもくれました。道はまだ途中ですが、まるで家庭のようなホームゲームの会場が作れたら、それが理想です。リーダーたちの「つなぐ」取組に終わりはありません。

スポーツボランティアリーダーの役割 (6)

ボランティアに困ったボランティアがいるように、リーダーにも困ったリーダーがいます。それはこれまで必要な資質としてあげてきた事柄を否定する人々ともいえます。もちろん繰り返しますがパーフェクトなリーダーは、たぶんいないと思います。大切なのは「いいリーダーをめざす気持ち」であり、「成長したいと思う」事であり、人から「聞いて修正できる力」であり「体験から改善できる力」です。

リーダーはともすると経験が豊富であることが条件になることから「保守的」になる場合があります。いい方にもよりますが、「俺がルールブックだ」だから「いう事を聞け」というような態度は、同じチームのスタッフから最も嫌われる事です。自ら希望してリーダーになるにせよ、依頼を受けてリーダーになるにせよ、一度その責任を持つことになったら、そうした自らが陥りがちなリスクについて考えておくべきだと思います。

現在、残念ながらスポーツボランティアのリーダー研修を実施しているところはあまりありません。スポーツの大会や継続的なイベントを運営する組織にとって、ボランティアの中に良いリーダーがいることは、ボランティア運営にとって大きなメリットを生みます。ですから、ぜひ、リーダーの育成に目を向けてほしいのです。

リーダーのための研修では、最低限そのスポーツの価値や大会やチームのめざすもの（理念・役割・目標など）の共有、ボランティア活動の意味と基本的なルール、リーダーの役割と必要なスキル（コミュニケーション・マナー・危機管理など）、そしてボランティアの楽しさ（楽しい活動を作る事、楽しさを伝える事は実はリーダーの大きな役割だと思えます）について、単に一方的に受講するのではなく、聞いて、自分達で考えて、理解し納得できるような内容でありたいものです。

スポーツボランティアリーダーの役割 （7）

いい関係を作ることについては前回書きましたが、では、悪くならないようにするということで、「困ったボランティア」について考えてみたいと思います。

社会の縮図でもあるスポーツイベント、そしてボランティア活動には実にいろいろな方が参加しています。その中に、なかなかチームワークになじめない人や、むしろチームワークを壊そうとする方が時折ですがみられます。基本的な活動のルールを守らない方については、リーダーとして注意し、それでもだめであれば運営者から注意、その上で登録をお断りという手順があります。私の経験では、活動中は見てはいけないといわれている観戦をやめない方、いろいろな物品を無断で持ち帰る方、乱暴な態度や口調でお客様とトラブルを起こす方などが実際にいました。

また、ルールを無視するのではないけれど、「いつも批判ばかりする人」「偉そうに指示ばかりする人」「自分はボランティアをやってあげているんだという態度の人」などもいます。こうした人たちの困ったところは、「自分は別にして」というところで、言いつばなしで自分はやらない、批判はするが改善案はださないなどどうしてもチームワークになじめないケースがあるようです。こうした場合、リーダーとしては個別に話し合い（できる限り他の人の目のない場所が理想です）、チームで活動するための注意をするようにしています。よほどのことがない限りそれで改善はしますが、中には受け入れてもらえないときもありました。その場合はボランティア担当や組織の責任者から注意していただき、それでも変わらない場合は、前述のとおり登録をご遠慮いただくこととなります。

スポーツボランティアをコーディネート （1）

<ボランティア活動をデザインする>

つい先日の5月11日、仙台国際ハーフマラソン大会が開催されました。3年前から一般ランナーも一定の条件を満たすことで参加が可能となり、ハーフの部門はわずか二日間ほどで一万人の定員がいっぱいになりました。いわゆるエリートランナーのみが走る大会のころは、陸連やスポーツ推進委員の方々が沿道の整理などをしていましたが、現在では2Km・5Kmを含め1万5千人ものランナーが走るため、一般公募のボランティアも年々増加しています。そのみなさんと一緒にどのようにランナーを迎え、より良いボランティア活動をするか、その打ち合わせは一年前に始まりました。

2013年5月の仙台国際ハーフマラソン大会、やや肌寒い天候の中、私達は一般公募のボランティアの方々と、会場からでるごみを分別回収する「エコステーション」の活動をしました。その日あったことについては、ボランティアアンケートも実施し、改善提案も含めて大会事務局に報告書を提出し、合わせてその日活動していただきさらにスポーツのボランティア活動を、継続的にやってみたいという方々を対象として、6月には40名近くの参加者を集めて、既存のスポーツボランティア組織とのマッチングイベントを開催しました。それだけの成果ではありませんが、既存のプロスポーツのボランティア登録数がそろって増加したことは、減少傾向にあった中でひとつの変化でした。

昨年の打合せでは、基本的には一般ボランティアの活動領域を、エコステーション活動から、ドリンク提供、タグ回収の活動にまで広げる事。さらに、国際大会・全国規模の大会らしく案内の活動に取り組むことなどが確認され、今年の大会では実際に前年に比較し大きく増えた仲間たちと活動しました。事前のリーダー研修会、前日確認、当日の活動の記録や、トランシーバーによる連携、何よりランナーへの声かけやハイタッチでのおもてなし。間違いなく、一年前よりも前向きに変化したボランティアの姿がそこにはありました。一方で、新しい活動分野を中心に今後への課題も多く見つかりました。この点についてはすでに、参加したボランティアはもちろん、ランナーの声も含めて聞き取り報告書の作成に入っています。

スポーツボランティアの活動は、単に言われたことをやればいい、ということだけではありません。もっともお客様や選手に近い場所で活動するからこそ見えてくる、いろいろな課題を、どうともに改善しよりいい活動にしていくのか。スポーツのボランティア活動をデザインしていくコーディネートはとても大切です。ここからは、このスポーツボランティアの活動をコーディネートすることについて、まとめてみたいと思います。

スポーツボランティアをコーディネート (2)

<役割とスケジューリング>

スポーツのボランティア活動をより良いものにするためにコーディネートが必要であることは、理解していただけたとしても、誰がどのようにそれをやるのか、どうすれば効果的でひとつの仕組みとして継続性のあるものになるのか。スポーツの分野ではまだまだこのスポーツボランティア・コーディネーターの必要性についての認識や、そのやるべきこと自体があいまいです。

多くの場合、ボランティアやリーダーの活動は、事前の説明会と当日だけというのが一般的です。けれど、むしろコーディネーターの活動は、そのイベントの前後が大切になるようです。私の経験では、大きなイベントがあり、ボランティアの活動が必要となった場合、最低でも半年程度前から打ち合わせがスタートしています。最初の段階では、活動の大枠を話し合い、当日までのスケジュールを検討します。そして、ボランティア活動の内容、それに合わせた募集人数や募集条件、何より募集方法について相談し、可能な限り既

存の仲間にも声をかけて協力しています。中間の段階では募集の状況を確認しながら、事前のボランティア説明会やその内容、用意すべき資料などの確認。実際の段階ではボランティアの配置や活動の詳しい手順、緊急の連絡体制から予測される質問に対する準備、活動に必要な備品類の準備までサポートしています。

当日はリーダーを中心に運営しますが、緊急時には運営者との調整役として動く場合もあります。そして、イベントが終了してから、活動したボランティアからの情報を収集し、報告書を取りまとめて、次への改善提案をし、記録することも大切なことです。

こうした流れは、単発型のスポーツイベントであれ、毎年繰り返し開催されるプロスポーツのイベントであれ、やるべきことは基本的には変わりません。もし違う部分があるとなれば、継続的なスポーツボランティアの活動では、登録ボランティアのための研修や、ボランティア同士の交流企画などがオフシーズンを中心に計画されることもあり、そうした企画や、運営も実は大きな役割になります。ともあれ、一年を通して複数のスポーツイベントのコーディネートをするには、労力的にも大きな負担となります。そのこと自体を楽しめるコーディネーターをいかに育成するか、さらに、その役割や、ポジションに関わる人々がいかに認知し理解し、協力しあえるか。大きな転換の時代を迎えています。

スポーツボランティアをコーディネート (3)

<効果的なボランティア募集>

スポーツボランティアの活動においてボランティアの登録が減少し、仲間が増えない事への対応については「仲間を増やすために」の項目でふれました。ここでは、コーディネートをする立場から、どう募集に関わるかについて考えてみたいと思います。

前述のとおり、ひとりでも登録し参加していただくボランティアを増やすためには、まずはできる限り参加しやすい募集条件や、楽しいと感じる要素を募集要項の中に盛り込むことが大事です。多くの場合、スポーツのボランティア活動は無償です。しかも、交通の便が悪いにもかかわらず公共交通機関のみで来てください、と募集しても当然参加するのは大変です。この場合は単純な事ですが、ボランティア用の駐車場を用意することや、一定の交通費補助をすることで、少なくとも活動場所までの足の問題が改善されます。

同様に、長時間の活動の場合は「弁当や飲み物」の支給が必要ですし、寒い時期であれば防寒機能のあるウェアの貸与などが求められます。まずは、募集する運営の担当とボランティアの目線で、意見交換し要綱に反映していただくことが大きな役割となります。

次に具体的な募集方法、募集段階での役割ですが、募集する対象がどこまで絞られているのかによって、どんな手段が効果的かなど、アドバイスの役割を期待されます。

このときにできる限り成果につながるアドバイスができるよう、自分が仲介したり働きかけることができるチャンネルを、どれだけ持っているかも大切です。学校・市民団体・メディア・既存スポーツでのボランティア経験者など、協力し連携できる相手が多ければ募集には必ず役に立つからです。

近年の傾向として、募集をホームページで行うケースも増えていきます。けれど圧倒的に多いのは、単に募集の条件と、活動内容などを列記するだけのものです。いかに具体的な活動内容を示すか、活動することの楽しさをいかに伝えるか、文章だけの堅苦しいものではなく、写真や図、できればイラストなどでわかりやすくできるか。自分の経験をまじえて提案することも必要です。

次に、応募してきたボランティアに対する対応についても、フォローが求められます。特に応募から実際の活動までの期間が長い場合は、あまり間をあけずにこれからの事や、現在の伝えられる範囲の情報をとどけることで、モチベーションの低下を防止することができます。自分が全く初めて活動するとしたら、そんな視点で、登録者の不安を取り除き、期待を高める事がコーディネーターには大事です。

スポーツボランティアをコーディネート (4)

<活動に必要なもの>

エコステーション、仙台のスポーツボランティア活動ではおなじみのものです。スポーツイベントの際にだされるごみを、可能な限り有効に再利用するため、ボランティアは観客とともに分別して回収しています。ごみの種類別のごみ袋、その表示、飲み残しのバケツやザル、紙コップをかさねるトレーにわりばしを入れる容器、周辺の清掃のためのちりとりにはうき、ぞうきんやテープ類、それらを収容するプラスチックケースまで、活動のためにはさまざまな備品や道具が必要となります。それぞれの数量、観客数に合わせた設置の場所や、その数。何より、活動していただくボランティアまで、エコ活動だけをとっても、いろいろなものを事前に準備しなければなりません。もちろん継続的な活動では基本的なパターンが決められ、多少システム化できるとしても、単発型では、その都度主催者と打ち合わせで準備し、前日の確認などをするのです。このように、スポーツのボランティア活動をスムーズに行うためには、その活動内容に合わせて、いろいろな準備が必要です。そして、できる限り万全な準備のためコーディネーターは主催者と打ち合わせし、確認をするのです。

全国のスポーツイベントで実際にボランティアが担当する活動のベスト5（2012年仙台大学全国スポーツボランティア調査結果より）は、「サンプリングやチラシの配布」「清掃」「会場案内」「入場口チケットもぎり」「会場の設営と撤去」となっています。スポーツのボランティア活動のコーディネートではこれらの活動の時間や、活動の場所、必要な道具や一連の流れや手順などを、検討しとりまとめを行い、さらに、問題が生じることがないようにしなければなりません。「活動に必要なもの」、そのさまざまな条件で変化することに、どう対応するか。経験の積み重ねが重要です。

スポーツボランティアをコーディネート (5)

<説明会と研修会 1 >

スポーツイベントのボランティア活動において、一番不足しているものが「説明会」であり「研修会」だと思います。それが単発型のイベントであれ、継続的な一定期間のイベントであれ、応募し活動するボランティアに対し、最も基本的な目的や活動内容を伝える「説明会」や、具体的な活動場所の見学をしたり、その手順を実際に体験してみる「研修会」などは、本来不可欠なものです。しかし、実際には説明会がない大会や組織も多く、当然研修要素を取り入れた「研修会」については、ほとんど実施されていないようです。運営者とボランティアの間をコーディネートする場合、「説明会」や「研修会」の実施やその内容を検討していくことは極めて重要なものになります。

通常「ボランティア説明会」は、イベントや活動シーズンの前に開催されます。年一回のマラソン大会や、単発型のイベント（国体など）では、大会の概要やボランティアの活動の本当に基本部分だけの説明が多いようですし、規模が小さい場合は活動当日に、ぶっつけ本番で説明ということも珍しくありません。これに対し、しっかりとした説明会の場合は、本番の活動場所に近い施設で、大会の趣旨・目的はもとより、ボランティアに期待する活動、活動内容に即した現場の確認や、使用する道具、発生する可能性の高い質問やトラブルへの対応の仕方、緊急時の連絡体制などを映像も交えてメリハリをつけながら伝えます。つまり、一方的に文章を中心に伝えようとする説明型だけではなく、そこに参加者が関わる研修の要素を適度に取り入れているのです。

毎年活動が継続しているサッカーのJリーグボランティアなどでは、継続ボランティアと新規のボランティアに分けて開催するケースもあります。また、参加率を高めるために平日と週末など複数回に分けて開催するなど工夫している所や、シーズン前はもちろん、シーズン中にも途中からの参加者を対象に積極的に開催している所もあります。こうしてみると、運営組織がいかにボランティアの視点で活動の質や意識を高めることに取り組んでいるかや、そこに活動の原点である「楽しさ」を感じる要素を盛り込もうとしているか、ボランティアに対する意識の違いがこの一点からも感じられるように思います。

スポーツボランティアをコーディネート (6)

<説明会と研修会 2>

前述のとおりボランティアに対する「説明会」は、活動時の不安を取り除き、楽しさを共有し、何よりやる気を高めるためにも、人数や大会の規模にかかわらずぜひとも開催してほしいのですが、一方的に運営する側が情報を「説明」するだけではなく、次のステップとしてボランティアを育て、いい連携を作り上げる「研修」要素を取り入れることについても考えてほしいと思います。

たとえば、継続して活動するボランティアに対する説明会では、簡単な今年の活動説明などで「活動は前年と同じです」ということで、わずかな日程の相違やスタッフの変更などを伝えるだけであまり中身のないケースもあるようです。これでは、いつもとおなじだからわざわざ参加する必要はない、とベテランの方々であればあるほど欠席するのではな

いでしょうか。説明会を開催しているのに、参加率が低いとしたら、それはきっと内容に問題があるのです。この場合、毎年テーマを設定し、例えば「日本一きれいなスタジアムにしよう」というようにして、エコ活動について講師から話しを聞いたり、自分達のできることをグループで話し合っ、具体的にやるべきことを決める事も可能です。あるいは、最もお客様に近い場所で活動するボランティアだけに、一定の接客マナーを身に付けてほしいとしたら、大きな量販店の接客担当の責任者などに協力してもらい、言葉づかいや服装、待つ姿勢、クレーム対応の話しをお聞きし、実際に声に出してみたり、ボランティアの中に得意な人がいたら、接客係りとして任命しシーズンを通して、レベルアップの取り組みことも楽しいのではないのでしょうか。毎年共通する部分や変更点の説明は必要としても、こうして毎回テーマが違い、自分にプラスになることがあれば、自然に参加率は上がるはず。ただし、どんな場合でも欠席者はいます、そのフォローもしっかりしたいものです。

忘れてほしくないのは、確かに毎回単純な活動の繰り返しを望む人もいますが、多くのボランティアは、対価のかわりに活動の中に自分の成長や、何より来場される人や仲間とのコミュニケーションを楽しみたいと願っているという事です。ですから、少しでも相手と良い関係を作るスキルアップへの関心はきっと潜在的にあるのです。ボランティアの成長は、そのスポーツイベントの成長に不可欠、私はそう信じています。

スポーツボランティアをコーディネート (7)

<危機管理と保険の話 1>

家族でのスポーツ観戦、それは平和の象徴ともいえるシーンです。しかし、観客が増加しイベントの機会がふえることは一方でさまざまな危機管理面でのリスクが増えることであり、「事故」「急病」「地震」「台風・大雨」「停電」など万が一のトラブルに対する準備が運営する側に求められるのです。しかし、現実にはスタジアムや体育館などからの避難訓練すら少なく危機管理全般に十分な体制がとれているとはいえないのが実情です。

予測できない災害や事故はチーム側・主催者側のスタッフとしてみられるボランティアにとっても無縁のものではありません。最初に「救命」ですが、病人やケガ人が発生した場合、まず主催者のスタッフに連動しその指示をあおぐことが大切です。しかし、初期の対応として消防署などが定期的に地域で開催している「救命講習」などに参加し基本だけでも理解していれば、その分だけ冷静で適切な対応が可能になります。その知識や経験は決してボランティア活動時だけに役立つのではなく、通常家庭や職場での生活時にも役立つものです、ぜひ自ら積極的に受講したいものです。

次に「災害」ですが、多くのスポーツ施設は災害時には避難所として決められている場合も多く、直近では東日本地震の際にベガルタ仙台のホームスタジアムである「ユアテックスタジアム」が「支援物資」の集積所として使用されるなど、ここ一番の際には地域の拠点として重要なものとなります。まずはその意味を十分に理解し自分たちが活動する施

設をみてみると良いでしょう。

また、イベント開催時の災害では、Jリーグの大分トリニータの熊本での主催ゲームにおいて、大雨の影響でゲームが中断しさらに駐車場に停めていた観客の車が水没し被害が発生、同じく甲府の試合ではゲーム中に停電が発生するなどの事例がありました。多くの場合こうしたトラブルは突然発生します。スポーツイベントのボランティア活動をコーディネートする場合は、必ず緊急時の連絡体制、災害発生時の心構えや、避難のための動線や場所については、確認しておきたいものです。

不特定多数の人々のために活動するという面では、スポーツボランティアと災害ボランティアには共通性も多いとされます。日ごろから基礎知識を学ぶことでいざ災害発生時には地域社会のために役立つことも可能となります。災害組織との連携は今後のテーマとして大変重要なものになるのではないのでしょうか。

スポーツボランティアをコーディネート (8)

<危機管理と保険の話 2>

本来楽しむことが目的のスポーツボランティアの活動ですが、現実には人が多く集まるイベントは社会の縮図であり、さまざまな事が起きています。とりわけ、マナーやルールを守らない観客が引き起こすトラブルは、観戦の楽しみを奪いかねません。

新聞などに登場する、サッカーの熱烈なサポーターによる差別的な横断幕の問題や、相手チームのサポーターや、負け続ける自分達のチームに対する暴力的な行為については、ボランティアが対応すべき領域を越えています。しかし、そうした行為を見かけた場合、あらかじめチームの関係者、警備や警察の関係者にいち早く連動できる体制は、確立しておきたいものです。

本来禁止されている座席での喫煙など観客のマナーが悪いことに対し、ボランティアが注意しトラブルになったケースも聞いたことがあります。荷物による席の確保、通路での観戦などどこまでがボランティアが注意すべきか、どこからはチームスタッフに任せるのか、活動の環境変化に合わせて検討し、周知する事が大切です。

私は原則としてボランティアに大きなリスクを持たせることがないように、事前の運営組織との打合せの中で、活動内容を考えていただくようにアドバイスしています。具体的には「お金」と「警備」に関わる活動は主催者がやるべきだと思います。これも以前実際にグッズの売上金の紛失や、駐車場での車の誘導による事故によって、ボランティアの責任が問われたケースがあったためです。どうであれ、最終責任は運営者にあることは自明のことですが、それでも巻き込まれたボランティアにはつらい経験となったはずです。

どんなに万全の体制を作り準備をしても、トラブルや事故は起き得ます。その対応として多くのスポーツイベントでは「イベント保険」や、「ボランティア保険」などをかけてい

るはずです。一方でボランティア自身もボランティア保険に加入している人も増えていきます。コーディネートする場合に大事なものは、事前の打合せの段階で、保険の対応についてしっかりと確認しておくことです。後悔先に立たず、忘れないようにしたいものです。

スポーツボランティアをコーディネート (9)

<見直す仕組み>

同じように変化している、スポーツやスポーツイベントを取り巻く環境は間違いなく変わっています。それは、観客の人数であったり、会場のレイアウトであったり、当日の天候であったり、本当に様々な要素が影響するためです。

サッカーのベガルタ仙台というチームは、仙台スタジアム（ネーミングクライツによって現在はユアテックスタジアム仙台）をホームとしています。2001年チームは昇格をかけて終盤まで激しいシーズンを戦っていました。観戦するサポーターが増加、ホームゲームではスタジアムから少し離れた地下鉄の駅まで、入場待ちの長い列ができるほどでした。そこで翌年J1に昇格を果たしたチームは、まずは席種による先行入場を実施、さらにコーンポストなどを使用して列を何度も折り、お客様の並び方を変更しました。この結果、入場待ちの列はスタジアムの敷地内に収まり、周辺への影響はなくなりました。

問題や課題を見つけた時に、それが当たり前ではなく、どうすればより良くなるのかを考え、実行し、それを仕組みとして誰もができるようにする。ボランティア活動の中でも非常に大事なことです。

前にも紹介しましたが、仙台のスポーツに限らず人の集まるイベントでは会場内にごみの分別回収を行う「エコステーション」が設置されています。この活動もおおくはボランティアが担当しています。サッカー、野球、バスケットなど種目や会場は違っても、分別の種類や方法はほとんど一緒です。それは、環境NGOが関わる事で方法の統一を進めたり、スポーツイベントを運営する各チームとボランティアが、意思を持って作り上げてきたからです。もし、これが各イベントで方法がバラバラだとしたら、お客様はとまどうしリサイクルの効果も半減するのではないのでしょうか。

さまざまな変化に伴い発生する問題や課題、それをより良い方向に改善し仕組みとして定着させること、そこにボランティアコーディネーターの存在は不可欠です。

スポーツボランティアをコーディネート (10)

<経験の共有>

ボランティア活動では当然の事なのですが、活動が長くなれば経験がその個人に蓄積されます。その結果、その方々がいることでボランティア活動がスムーズになされることがあります。一方で、単発型はもちろんプロスポーツのように継続する組織であっても、ボランティアやイベント運営のスタッフの入れ替わりは思いのほか頻繁に発生しています。引継ぎも十分行われないケースも多く、経験の乏しいスタッフをボランティアが支えるとい

うことが起きますし、時として窓口となる新人スタッフの対応が悪いことで、ボランティアがやる気をなくしどんどん減ってしまうという事も現実に起きています。もちろんただ長く活動している人を大事にしろというわけではありません。重要なことはルールや活動の流れ、問題発生時の対応などが個人の経験からくる判断に依存するのではなく、運営者と中心的なメンバーの協働作業によって、明文化したり、研修などで共有化されることなのです。

どんなスポーツのボランティア活動であっても、より良いものにしていくためには、活動をコーディネートする人にも、運営をする組織の人にも、「人を育てる」「後継者を作る」という意識がなければなりません。関わる人が増えれば増えるほど、チームスタッフやわずかなボランティアリーダーでできることは限られて来ます。このとき条件は年齢や性別ではありません。若くてもきちんと物事を理解しいやな事にも率先して関わる人は大勢いますし、ボランティア同士をつなぐ事などはむしろ男性より女性の方が得意とするところですが、ここがポイントですが、突然、あなたにこの役割をと押し付けるようなやり方は好ましくありません。できる限り次の活動を中心に中心的なポジションで担ってほしい、ということ、相手の反応や想いも聞きながら説明し、そのために、一人ではなく経験を一緒に共有しましょう。と伝える事が必要です。

リーダーにも共通することですが、スポーツイベントの運営組織と一般のボランティアの間をつなぎ、スムーズな活動を創りだすと共に、これからに向けて改善に取り組むということは、時として批判の対象となることもあれば、人間関係で悩むこともあります。しかし、誰かがその役割を果たさなければ、ボランティア活動はいい形では絶対に続かないのです。見ている人は見ていてくれる。そう信じて小さな喜びを大切にしたいものです。

スポーツボランティアをコーディネート (11)

<記録すること、伝えること>

これまで多くのスポーツイベントの運営にボランティアとしてかかわってきて、ボランティア活動を記録することや、その結果や楽しさを情報として発信することに積極的な組織・スタッフに会ったことは残念ながらありません。お客様を多く集めるために、イベントの情報発信が最優先され、ボランティア活動の情報は、後回しという印象を受けます。たとえば、イベントの会場で配布される当日のプログラムやチラシ、イベントやスポーツ組織のホームページなどで、ボランティアの活動が取り上げられることもほとんどないのが実情です。

いうまでもなくスポーツイベントは地域の中で開催され、来場される観客の多くもそこに住む市民です。そして、ボランティアもまた地域に住み、自ら望んでそのスポーツを支えるために参加しているのです。そのスポーツイベントが同じ市民によって支えられてい

るきわめて身近で、地域の大切な財産であるということをちょっとでも意識できれば、観客とボランティアの境はないことに気が付くはずです。

多くのボランティア組織が参加者の減少や、運営組織とボランティアのコミュニケーションなどで苦勞している中で、近年のネット環境の進歩もあり、ホームページはもちろん Facebook やブログなどを活用し、上手にボランティアの情報を発信するイベントやチームも増えています。例えば1万人以上のボランティアが参加する全国屈指のスポーツイベントである東京マラソンでは、公式ホームページにボランティアのブログがあり、毎週決まった曜日に役だつ情報を発信することで、モチベーションアップにつなげています。サッカーの松本山雅FCの後援会が運営するチームバモスというボランティア組織では、さまざまなボランティア活動の情報を発信するとともに、オフシーズンには数多くの一般市民も巻き込んだイベントを開催したり、エコ活動の取り組みを行っています。共通しているのは結果としてボランティアが増加していること、しっかりやれば結果はついてくるといふ見事なモデルです。

※ 東京マラソン ボランティアブログ

http://www.tokyo42195.org/2013/volunteer_info

※ サッカー松本山雅FC チームバモスブログ「蹴刊バモ通」

<http://www.matsuaz.com/team-vamos>

スポーツイベント、そしてそのボランティア活動をより良いものにするためには、記録し情報を発信することが大切であり、そのためには、意識して写真をとったり、打ち合わせなどの記録をまとめたり、報告書を作るなどの仕組みを作る必要があります。それは確かに大変ではありますが、きっといつか歴史となり、大きな成果につながるはずです。

スポーツボランティアをコーディネート (12)

<コラボすることから広がる>

ボランティア活動をコーディネートするということは、とにかく必然性に迫られて動くこともあれば、将来に向けて種をまいていこうという活動もあります。どちらであっても、個人でやれることは限られていて、いろいろな人や組織と連携することで成果につながりやすくなります。ですから、活動を通じて知り合う人々をいかに大切にしつなかりを強くするか、何かあった時にどう連携すればいいのかを考える事、コーディネートの醍醐味はそこにあるのかもしれない。

たとえば、観客への接客や応対をもっといいものにしたいと考え結果として来場者の数を増やしたいと思った時に、ターゲットとする層が明確であれば、それだけでネットワーク型の取り組みが可能になります。子供連れのファミリーが対象であれば、スポーツの会場に託児所や子供向けのあそびのスペースを設けたり、子供向けのゲームを企画したりす

ることがあります。しかし、一般のボランティアや運営のスタッフだけでは十分な子供の世話は困難ですし、リスクも生じます。この場合には、子育て系のNPOや、教育系の学校との連携があれば、有益なアドバイスや時には人の提供が見込まれます。

社会貢献の意味の含め障害をお持ちの方々の招待事業を強化するのであれば、福祉の施設や学校、NPOとの連携が効果的です。

他にもスポーツイベントから排出されるごみの減量やリサイクルの取り組みを進める場合には、環境NPOと連携してもいいですし、地域全体での盛り上がりを期待するのであれば、地元の商店街や商工会議所との関係作りが大切になります。

こうして考えてみれば、スポーツがスポーツだけで完結するという時代は終わり、必要な分野の専門家や組織と、ボランティアが上手に連携することがますます大事になっていると思います。

あなたが成功させたいスポーツイベントのボランティア活動をいいものにし、その運営組織の発展を望むのであれば、さまざまな課題を把握した上で、どんなコラボがどんな効果を生むのかを考えてみてください。そこから新しい広がりが生まれるはずです。

スポーツボランティアをコーディネート (13)

<ボランティアの交流>

それがマラソンの大会であれ、サッカーであれ、バスケットであれ、今、全国に自分達と同じようにボランティアをしている仲間が大勢います。地域や種目が違っても、ボランティアの活動には驚くほど共通性があります。ですから、ボランティア活動をコーディネートする立場の人には、ぜひ、積極的なボランティア交流をおすすめしたいと思います。

私がボランティア活動を始めた1998年ごろ、継続的なプロスポーツのボランティアはサッカーのJリーグのボランティアが大半でした。幸運にも集まる機会に恵まれ、年齢の差を越えた各地の仲間との付き合いがスタートしました。メールでのやり取り、お互いの活動への体験参加、時間を忘れた飲み会などを通じてその輪は確実に広がり、その後誕生したプロバスケット、プロ野球、各地のマラソン大会の仲間も巻き込み、今では100名近いネットワークを持つようになりました。各地を旅行する場合にはできる限りその地域の仲間と交流し、活動の様子を観させていただき、特に東北では毎年一回持ち回りで「東北スポーツボランティア・サミット」という交流イベントを開催するようになりました。

交流の最大のメリットは、お互いの活動の良いところを素直に学べるところです。エコ活動の方法、情報発信のやり方、来場者のもてなし方、いい所を学ぼうという気持ちさえあれば、プラスになることはたくさんあります。次に、共通性の高い活動内容であることから、一緒に良くなる方法を考えることができたり、互いの大変さを理解し合うことで疲

れた心を癒すこともできます。

最近のことですが、マラソン大会の経験が乏しい私達の活動に、全国各地の規模の大きい大会でのボランティア経験の豊富な仲間に加わっていただいたことがあります。全体的な視野の広さや、臨機応変な対応力、ゴールし足がつって倒れたランナーのケアまで、教えられることは本当にたくさんありました。ボランティアの活動では、確かに自分達で考えたり、運営組織との連携で改善していくことはもちろん重要です。しかし、知らない事を教えてもらい、何よりボランティア目線の改良のための意見を聞くことは、けっして恥じる事ではないと私は思うのです。なぜなら、主役はあくまで観客であり、選手なのですから。より良いもてなしのために出来ることは積極的にやるべきではないでしょうか。

スポーツボランティアをコーディネート (14)

<地域とともに 1>

スポーツのボランティア、その活動をコーディネートする活動を続けてきて、いつの間にか私達は「スポーツを通じたまちづくり」に関わるようになっていくことに気が付きました。そのことは、自分達の活動を、ボランティアの存在をまわりが認めてくれたということですし、これからの様々な可能性に期待しているということなのでしょう。

仙台には、プロサッカー、プロ野球、プロバスケットのチームの拠点があるほか、バレーボールやフットサル、女子プロレスなど継続的に活動するスポーツチームもあります。スポーツは平和の象徴であり、元気の源と信じ、今ここにあるものを無くさずに発展させたいと思い活動してきて、結果としてさまざまなスポーツボランティア組織の立ち上げと運営に関わり、その支援組織にも加わって意見を言わせていただく機会も増えました。行政や企業、何より多くの仲間とのネットワークも生まれました。しかし、尚、ボランティアの活動の基盤は脆弱であり、その認知の範囲も限定的であることもまぎれもない事実なのです。

この数年、やや世界に比較し遅れた感のあった日本のスポーツ行政の中で、「スポーツ基本法」が制定され、そこに「スポーツボランティア活動に関する事例紹介等の普及・啓発の推進」という文言が入りました。これを受けて策定された仙台市のスポーツ推進計画では、さらに一歩進めて「スポーツ指導者やスポーツボランティアの養成」「ボランティアネットワークの構築」が、宮城県のスポーツ推進計画には「スポーツボランティアの育成と支援」が盛り込まれ、他の県と比較してひとつの特色となっています。震災復興の支援の意味もあり、2020年の東京オリンピックの開催が決まり、宮城でもサッカー競技などの開催が予定されています。そのために全国規模では約8万人のボランティアを養成していくことが、文部科学省の計画としてメディアに取り上げられました。この大きな変化の

時代、私達の活動も無関係ではありません。であれば、受け身ではなくむしろ、認知を高め、広がりを作る大きなチャンスととらえ、地域とともに活動したいものです。

※ スポーツ基本法

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/08/24/1310250_01.pdf

※ 宮城県スポーツ推進計画

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/supoken/spsin-ke20index.html>

※ 仙台市スポーツ推進計画

http://www.city.sendai.jp/manabu/sports/keikaku/_icsFiles/afieldfile/2013/04/11/keikaku.pdf

スポーツボランティアをコーディネート (15)

<地域とともに 2>

スポーツボランティアの活動を続けるためには、そこにスポーツ自体を存続させるための施設や組織が必要であり、何よりそこに住む人々にとってそのスポーツ（チームやイベント）が必要とされる事が不可欠です。ですから、イベントの際に運営がスムーズにできればそれだけでいい、という活動もあれば、そのイベント・組織の発展のために活動することもボランティア活動の大きな要素となっています。

例えばあるサッカーチームがあるとします。地域に愛されいつかJのトップリーグで戦う事が目標です。熱心なサポーターも増えていますが、けっして経営は楽ではありません。ボランティアとして参加し運営を支えながら、チームの夢をいつか現実のものとするため、ゲームの無い日には、街でゲームの開催を知らせるチラシを配布したり、ポスターを持って商店街をチームスタッフと一緒に回る事もあります。仲間の中には、チームのクリーニングを無料で引き受けたり、自分達が育てた農作物を元気ができるようにと差し入れする人もいます。「できる事で応援すること」、その活動すべてが実はボランティア活動かもしれません。

2011年4月29日、わずかひと半月ほど前に東日本大震災という未曾有の災害に襲われた宮城県で、その日を「復興デー」にしようという機運が高まりました。被害によって停止していた東北新幹線の再開、同じく仙台市営地下鉄の全線復旧、そして、何より仙台をホームとする、サッカーのベガルタ仙台とプロ野球の東北楽天ゴールデンイーグルスのホーム開幕試合の開催。まだ苦しい中ではありましたが、目標があり、地元のチームを応援できるというスポーツによる連帯感（絆）は、あの日人々の気持ちを間違いなく明るく強くしてくれたと思います。その手伝いを少しでもできたとしたら、私達は本望です。スポーツのボランティアコーディネート、活動の先には地域が、その未来があることを忘れないようにしたいと思います。